氏　　名　前田忠直（まえだ ただなお）

学位の種類　工学博士

学位記番号　論工博第2331号

学位授与の日付　平成2年3月23日

学位授与の要件　学位規則第5条第2項該当

学位論文題目　ルイス・カーン研究
—思惟の方法と存在論的建築

論文調査委員　（主査）教授 川﨑清　教授 西川幸治　教授 三村浩史

論文内容の要旨

ルイス・カーンは，今世紀20年代から50年代にかけて，世界に流布したいわゆる近代建築と，その後に続く新しい現代建築の潮流の間に位置する時期に活躍し，近代建築家たちとは異なる方法と意匠・様式を確立し，近代建築を克服した建築家の一人である。

ルイス・カーンは多くの「存在論的哲学言語」と「視覚的言語—素描」によって建築の方法を語っているが，本論文は，その難解な思惟の内容を詳細に検討し，カーンの建築的思索の方法を解読した。これによって本研究は，近代建築，現代建築の思想に新しい視座を与えようとする試みである。本論の構成は，上記の目的に従い，序論，第一部（第一章，第二章），第二部（第三章，第四章），終章に区分され，25節から成る。

序論，第一節では，はじめに，本論の主題に相関する研究の方法について，現象学と存在論の関わり合いを参照しつつ明らかにしている。序論，第二節，「作品と言葉」では，厖大な量の草案群と夥しい言葉が示すカーンの思惟形成の特異な過程が記述され，かれの方法的問いによって「問われているもの」が「存在」であることが，まず示されている。

第一部では，かれの思惟作用それ自体に着目し，思惟の方法が主題化され論及されている。第一部は，第一章，沈黙と光の思惟，第二章，リアライゼイションの構造に区分される。最後期の沈黙と光の存在論的思惟は，二章で言及する「フォーム・リアライゼイション」の構想の深化，変転したものと見なせることが示される。この思惟の解明は，第二部において論及される建築への問いにおける「建築のフォームへの問い」と「建築の存在への問い」との区別を基底づけるものである。沈黙と光とはカーンの思惟に於て峻別される二者，すなわち，「人間の事象」と「自然の事象」を意味するとし，「沈黙から光へ」（silence to light），「光から沈黙へ」（light to silence）と重層化される移行の意味が超越，還元の問題として記述され，現象学的存在論により解釈されている。また，二つの移行を交叉する閾の実在論的意味が明示されている。さらに，光の思惟を図解する素描が解読され，主要作品，ダッカの議場の素描が，光と構造の問題として分析されている。

二章では，カーンの思惟の根幹をなすリアライゼイションの深層構造が，1960年代の前半の表明に基づき，感情と思惟，サイキ内の二者（存在意志とイナ），さらにサイキと自然として，三重の二項対応に於て記述され，分析されている。これはカーンの意識論であると同時に世界論でもあり，かれの建築的思惟の基層をなすものとされる。

第二部では，第一部で明らかにされた思惟の方法における形相的問い（思惟），超越論的問い（感情）に基づく存在論的建築が主題化され，二段階の還元として解明され，究明されている。すなわち分析は，第三章，建築のフォームへの問い，第四章，建築の存在への問い，に区分され遂行されている。三章では，思惟の深化と近代建築批判において，晩年の成熟の意味が，素描に於ける「影」の解明として記述され，次に，1950年代の思惟が，リアライゼイションの立場がら批判的に問い直されている。14節では，かれの思惟の主導語フォームの諸限定について明らかにされ，15節では，フォームの形相的限定，「不可分な諸要素の自覚」の意味の射程が，スプーンの事例に即して解明されている。

四章では，建築に即した言葉によって示されたカーンの建築論が論及されている。はじめに，最後期の主導語であるインスティチューションの意味するものが，根本語，インピレーションとの関わり合いにおいて示されている。さらに，ユニテリアン教会のフォームの図式におけるアンビュラトリー（回廊）の意味，元初の学校の意味，修道院に於けるゲートウェイの意味，建築の学校とボーイズ・クラブのコートの意味が記述され，分析される。終わりに，カーンの作品世界の根本図式がユニヴァーシティの事例に即して，「コネクションの建築」の意味の究明がなされ，存在論的建築の実現の仕方が明示されている。

終章では，一部と二部を結び合わせ，端的に，カーンの思惟にとって「建築」とはどのような問題であったかが問われている。さらに建築の存在の問いの深化によって「建築の元初としてのルーム」の問題が主題化され，論及されている。あわせて，建築家および作品の意味が究明され結論となっている。

論文審査の結果の要旨

近年，近代建築史に関する研究において，建築家の研究が，多くの研究者によって繰り返し行われている。その理由は，建築のデザインの本質的な問題が多様化し，拡散する現代建築の状況のなかで，勝れた建築家の方法を研究することによって，建築の本来の意味を問い直すことが，可能であるとみなされるからである。ルイス・カーンの建築思想の研究は，これまで建築史家，建築論研究者，建築家からのいくつかの言及があり，カーンの思想の独自の意味への関心が寄せられているが，その思想は難解であり，充分な成果が得られていない。

本論は，カーンの言葉，素描の精密な構造分析を通して，かれの建築思想の特性を明らかにし，ひいては建築そのものの本質に関わる問題を論じようとする方法論的な論及であるといえる。その分析にあたり，現象学，存在論などの哲学的諸研究の解釈を導入した建築論的立場の論証を展開しており，意欲的であり，かつ意義深いものと判断される。その得られた主な成果は次の通りである。

1．著者は，序論において本研究の分析の方法が，現象論および存在論の立場に據っていることを明らかにし，第一部において，カーンの思惟の方法を解明した。カーンの究極の思想といえる沈黙と光の思惟は，存在論的思惟として解明された。また，かれの思惟の根幹を構成するリアライゼイションの構造は，

意識の深層の問題として明らかにされ，メルロー・ポンティ，ハイデッガーの存在論思想によって解釈がなされた。

2．第二部において，カーンの思惟の歩みが三期に区分され，それぞれの時期における建築の方法を規定する主導語が，オーダー，フォーム，インスティチューションとして捉えられ，それらの意味の相違を示すことを通して，カーンの思惟の深化，変転の意味が解明された。これによってカーンの思惟が存在論に通底することが明らかになった。

3．カーンの建築作品の主要なエレメントであるアンビュラトリー，ゲートウェイ，コート，フォーラムの発生的意味が，学ぶ施設，つまり教会，修道院，建築の学校，ユニヴァーシティなどの具体的な建築の制作の方法に即して分析され，それらのエレメントが内包する超越論的＝存在論的意味が究明された。さらに，カーンの存在論的方法が，「コネクションの建築」という概念を介して建築の具体化に向うことが明らかになった。

4．終章において，カーンの最後期における，建築の問いの深化の過程を明らかにし，あわせて晩年の根本語，ルームの実存論的意味が究明された。

本論の方法論的な研究の成果は，これまでのカーン研究にその基礎を与えるものであるが，通常の人物研究の様に，一人の建築家の生涯と作品を詳びらかにしようとするものではなく，かれの思惟の方法を考察することで，近代建築の克服の仕方を明らかにしようとするものであり，近代建築思想，現代建築思想の研究に新しい視座を与えるもので，得られた知見も多く，学術上，実際上寄与するところが少なくない。よって，本論文は工学博士の学位論文として価値あるものと認める。

また，平成元年12月22日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。